介護の知識と認識

中二

僕の父は、高齢者の介護の仕事をしている。ゴールデンウィークも年末年始も休みはない。それでも、僕の空手の練習や試合には付き添ってくれる。僕は、それをありがたいと思いつつ、どこかで当たり前だと思っていた。でも、父の仕事は、僕の想像をはるかに超えたものだった。

ある日、父が母に、ぼそっと話しているのが聞こえてきた。母は、静かに聞いている。どうやら、利用者さんが、訪問したら亡くなっていたらしい。仕事のことは全く口にしない父だが、そのようなことが続いて、やりきれなくなっていたと後から母に聞いた。テレビの中で見聞きすることが、父の日常に転がっているのだと知った。それは、かなり酷なことだと思う。でも、父は、今日も仕事に行く。僕は、分からなかった。介護業界は、人手不足で、重労働。給料も低い。正直、魅力がある仕事には思えないし、人の死も身近だ。

そこで、僕は父に「なぜ介護の仕事なのか」と直球を投げてみた。すると、父は言った。

「人生の先輩が困っていることを、手伝っているだけだよ。できないことは増えるのかもしれないけれど、人生の先輩だ。学ばせてもらうことの方が多い。」

父は、この仕事に誇りをもっていることが、ひしひしと伝わってきた。同時に、父のような人たちが、社会の中でどれだけ必要なのか知ってほしいと思った。

これから、ますます超高齢化社会になっていく。でも、僕のように、介護について認識の浅い人は多いと思う。知っているようで知らないことは、大きな弊害になる。

僕は高齢者とあまり関わりがない。一度、父の仕事場でボランティアをしたくらいだ。でも、母は高齢者と関わることも多く、やはり、学びが多いと言う。今までの経験からにじみ出てくる言葉や姿勢が、真似できないということらしい。僕は、気付いた。インターネットなどの情報は、知識にはなるが、本物の認識にはならない。やはり、関わることが大切だ。ボランティアでなくても、普段の生活の中で意識すればいい。

すると、たくさんのことが見えてきた。段差につまずきやすいなどの身体的なことだけではない。人間味を強く感じたのだ。赤ちゃんに優しくほほえみかけて、親子をそっと見守っていたり。重そうだったから、カゴをレジ台に上げたら、僕の目をみて、「ありがとう。」と言ってくれたり。なんだろう、共に生きていると感じ、共にいたいと思った。

父の仕事は、目に見えていること以外の方が、やりがいも大変さも大きいのだ。直接触れて、話して、関わる。感情をその都度読み取って、最良のサポートを考えていく。常に臨機応変な対応が必要で、リアルな信頼関係が大切だから、ＡＩにはできることではない。高齢者の方と向き合い、尊敬の気持ちがなければ務まらないのだ。

高齢者の人権は、僕たちの考え方や関わり方で大きく変わると思う。人生の先輩と共に暮らし、生きやすい社会を僕は創りたい。